

令和7年度 学校関係者評価 総括

I. 学校関係者評価の概要と実施状況

1. 学校関係者評価の目的

- 1) 看護学校の自己評価結果を元に、外部の意見を反映する学校関係者評価委員会を開催し、その意見を教育活動及び学校運営等の質の保証と向上に活用する
- 2) 学校関係者との連携により、特色のある学校づくりを推進する。

2. 学校関係者評価委員

規定	委員
教育に関し知見を有する者	大学教員養成センター 特任教授・アドミッションセンターアドバイザー 看護専門学校 実習調整者
看護管理者経験者	臨地実習施設 看護部長
卒業生	卒業生
保護者等	保護者

3. 学校関係者評価実施日

評価日時：令和8年3月17日（火） 14時～16時

場所：3階講義準備室

II. 令和7年度 看護学校目標

1. 学生が「この学校」で学んでよかったと思える教育の実践
2. 広報活動と学生募集の強化による質の高い学生の確保
3. 専門領域の充実による教員の実践能力および学校マネジメント力の向上
4. 「チーム学校」としてパフォーマンス向上できるような働き方改革
5. 臨床との連携強化による医療者育成支援

III. 目標についての取り組みと今後の課題

目標 1. 学生が「この学校」で学んでよかったと思える教育の実践

取り組み	1) 少人数指導による、学習環境の整備 2) リフレクション力の向上 3) 実習成績下位者に対する学習補填
評価	1) 少人数指導による、学習環境の整備 今年度初の取り組みとして、1年生に対して少人数クラスを導入した。通常2クラス（1クラス45名）で運営しているが、前期3科目、後期4科目を3クラス（1クラス30名）で運営することで、学習効果の向上を目指した。その結果、前期の3科目とも学生による授業評価、成績の平均点・中央値、実技評価の平均点・合格率においてすべてが上昇した。

	<p>2) リフレクション力の向上</p> <p>看護技術演習や実習においてリフレクションを行うことで、単なる反省ではなく自身の実践を積極的に振り返り、その行動や判断について随時見つめなおす機会を可能な限り設けた。</p> <p>看護技術演習では、学生同士のピア評価の導入またタブレットで撮影することでその場を振り返り、看護実践能力の向上に繋げた。特に実技評価（移乗・採血・点滴作成）の在り方を見直し、評価前・評価直後に教員によるリフレクションを行った。実技評価の平均点は上昇する結果となった。</p> <p>実習では、日々の実習記録に「リフレクション・学び」の欄を設けている。記述できない学生は自己の看護実践を振り返ることができず、看護について理解できていないことが多い。記述の必要性の指導を行い共に振り返りを行うよう意識した。</p> <p>3) 実習成績下位者に対する学習補填</p> <p>2年次日常生活援助実習において評価点が65点以下の学生及び教員が補習必要と判断した学生8名に対し、夏季休業期間に個別に補習を行った。自己の到達状況と課題について明確にし、評価点が3点以下であった項目を中心に補習を行うことで看護過程展開の強化を図ることができ、秋・冬に実施した生活支援看護実習Ⅰ・Ⅱでは実習成績の向上がみられた。看護基本技術Ⅲや成人経過別看護Ⅳ、老年援助論演習など看護過程を展開する科目のグループワーク演習に応援教員を追加し、看護技術だけでなく思考過程の整理を少人数で指導できる体制を整えていくことで、ベースアップを図った。</p>
今後の取り組みと課題	<p>1) 少人数指導による、学習環境の整備</p> <p>今年度の少人数支援学習効果は高かったことが明らかであるが、教員の授業時間数は増加したため教員の負担軽減に対する取り組みも必要である。そこで、次年度は少人数クラスの科目を2科目まで減らして対応することで、教員の負担を軽減しつつ、学習効果を高められる学習環境づくりを行う。</p> <p>2) リフレクション力の向上</p> <p>よりよい看護実践を行うための知識・技術を身につけるため今後も学生自身がリフレクションを行うことを支援する。</p> <p>3) 実習成績下位者に対する学習補填</p> <p>実習成績は年度ごとに低下傾向にあり、1年次の春季休業の課題に看護過程展開の内容を追加するなど、2年次の実習開始までの強化を図っていく必要がある。また、講義の中で看護過程を展開するグループワークについて応援教員体制を継続していく。</p>

目標 2. 広報活動と学生募集の強化による質の高い学生の確保

取り組み	<p>1) オープンキャンパスおよび個別相談会の強化、学校見学会の開催</p> <p>2) 広報企画室と連携してHPをはじめとした広報媒体のリニューアル</p>
評価	<p>1) オープンキャンパスおよび個別相談会の強化、学校見学会の開催</p> <p>・オープンキャンパスは昨年度7回開催から1月の開催を追加し、合計8回開催した。</p>

	<p>(うち夜間開催1回)参加者は今年度合計235人である。(2月末現在)今年度より、オープンキャンパスの内容を見直し、近畿グループの国立病院機構の病院紹介や模擬面接、高齢者体験、公開授業「赤ちゃんの誕生を支える看護師の役割」についてのテーマを追加した。個別相談や看護学生との交流は引き続き行っており、参加者アンケートでも好評を得ている。オープンキャンパス以外でもWEBや対面での個別相談を行っている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今年から看護学校の一日を体験できる「看護学校とらいある」を企画し、現役高校生2名の参加があった。 ・歩留まり率の向上のため、今年度より一般入試の合格者を対象に「入学前の看護学校体験」を企画したが、参加者は0名であった。 <p>2) 広報企画室と連携してHPをはじめとした広報媒体のリニューアル</p> <ul style="list-style-type: none"> ・広報企画室と連携し、インスタ投稿やホームページのリニューアルに取り組んでいる。その結果、インスタの4月～12月までの投稿数53件(総投稿数168件)、インスタのフォロワー総数1163(新規フォロワー497)となった。HPのトップページにInstagramの小窓を設けることで、日々の情報発信がHPからも閲覧できるようにし、情報発信している。HPの10～12月間の全アクセス数は4833(前年比-13.5%)。HPの投稿14件である。 ・今年度から入試はweb出願とした。 ・令和8年度の入学試験の応募者数は、前年度と比較して、ほぼ変わらなかった。広報媒体のリニューアルや発信、オープンキャンパスの取り組みを行った成果と考える。広報企画室と連携強化に加え、学生の広報委員を中心に、学生目線での投稿を行い、さらにインスタのフォロワーを増やしていき、学生募集につなげる。
今後の取り組みと課題	<p>1) オープンキャンパスおよび個別相談会の強化、学校見学会の開催</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生の広報委員や広報企画室と連携しホームページのリニューアルやInstagramの発信を継続する。 ・質の高い学生の確保のため、オープンキャンパスの参加者や入学試験合格者に対して、個別で関わり、歩留まり率を上げる。 <p>2) 広報企画室と連携してHPをはじめとした広報媒体のリニューアル</p> <ul style="list-style-type: none"> ・HP、インスタグラムの更新回数をあげる。

目標3. 専門領域の充実による教員の実践能力および学校マネジメント力の向上

取り組み	<p>1) 学会や研修への積極的に参加</p> <p>2) 授業研究の実施と参観およびリフレクションへの参加</p>
評価	<p>1) 学会や研修への積極的参加</p> <p>学会に、のべ33人、研修にはのべ17名の教員が参加している。伝達講習や学習会は計3回実施している。国立病院総合医学会では3つの演題を発表した。研究時間は7名</p>

	<p>の教員が平均 1 時間半の研究時間を取得している。6 名の教員は研究時間を取得できていない。</p> <p>2) 授業研究の実施と参観およびリフレクションへの参加</p> <p>4 月に、担当科目の授業計画を教員全体で共有を行い、夏季に前期の科目の授業実施状況や課題を全体共有したことで、全ての教員が各科目同士のつながりを意識して講義を行うことができた。また、2 年目以上の教員全員が授業研究を実施した。平均 3 回/人以上の授業研究へ参加したことで教員の実践能力の向上を目指した。さらに、今年度は外部講師に授業研究へ参加してもらい、授業に対しての助言だけでなく、リフレクション方法についても助言をもらい、さらなる実践能力向上に取り組んだ。その結果、学生の授業評価では、令和 6 年度 平均 3.35 に対して令和 7 年度 平均 3.42 であった。令和 7 年度の授業評価は 1 月時点で講義終了している科目のみのため、一概に比較はできないが上昇が見込める。昨年度授業評価入力率が低かったため、評価入力に対して、チェックリストの作成や入力時間を確保することで入力率は 95%であった。</p>
今後の取り組みと課題	<p>1) 学会や研修への積極的参加</p> <p>研究時間を計画的に取得できるよう、業務調整を図っていく。</p> <p>2) 授業研究の実施と参観およびリフレクションへの参加</p> <p>授業計画の共有、授業研究の実施や外部講師によるリフレクションの参加により、教育力の向上につながった。次年度も継続して実施していく。授業評価の入力率向上についても引き続き取り組みを行う。</p>

目標 4. 「チーム学校」としてパフォーマンス向上できるような働き方改革

取り組み	<p>1) ICT 活用による業務の効率化</p> <p>2) 学籍システムの移行</p> <p>3) 各プロジェクトによる取り組み</p>
評価	<p>1) ICT 活用による業務の効率化</p> <p>業務の効率化のため使いやすい ICT 技術を導入し、学生と教員のデジタルリテラシーを向上させる目的で年間活動を実施した。Teams を活用できるよう整備し、講師を招いての学習会を開催した。年明けから全教員スケジュールの共有管理を開始した。ICT を活用した出席管理プログラムのトライアルを実施したが、導入には至っていない。成績管理システム業者を変更し、今年度より導入を開始している。12 月には、医療・看護教育 DX に取り組んでいる浜田医療センター附属看護学校の研修に 7 名で参加し、教員会議で伝達講習を実施した。</p> <p>2) 学籍システムの移行</p> <p>学籍システムを変更。計画的に実施し、1 月時点で 1・2 年生の成績については新システムでの成績処理を実施している。新システムでは、学生の科目毎の順位や成績だけで</p>

	<p>なく出欠状況の登録も可能となり、学生はアプリから自己の成績や出欠状況を確認できる。成績は科目ごとに、学生自身で点数分布が確認できるため、周囲と自己の位置づけもタイムリーに確認できるよう調整中である。</p> <p>3) 各プロジェクトによる取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・環境・ICT 整備プロジェクト <p>ICT 導入に向けて、Microsoft Teams 研修を実施し、教職員間で活用に関する共通認識を図った。また、他校での DX 活用研修への参加や伝達講習から知識共有を促進した。スケジュール共有の試用や、運用方法の検討をしたが具体的活用までは至っていない。環境整備では、棚や倉庫整理により物品の出し入れが円滑化し、教務室の業務スペースも改善した。学生の清掃体制について、当番の見える化、清掃用具の選定・配置などにより、清掃活動が徐々に浸透している。</p> ・学校評価プロジェクト <p>学校評価の意味や目的を教員全体で共有する機会を持ち、学校評価に対する理解を深めたことで、継続して学校目標に取り組めた。</p> ・心理的安全性プロジェクト <p>教員・学生共に挨拶啓蒙ポスターを作成した。また、雑談や私的なコミュニケーションの機会を設けたことで、自己の意見を安心して提案できるようになった。学生の学習環境について整えたことでハラスメントなど苦情の連絡はなかった。</p>
<p>今後の取り組みと課題</p>	<p>1) ICT 活用による業務の効率化 Teams を活用しての教員スケジュールの共有管理が効果的に活用できていないので、活用を進めていく。今後も ICT 化を促進し、業務効率化・業務改善を図っていく。</p> <p>2) 学籍システムの移行 学年末の成績処理と令和 8 年度に向けての最終調整を行う。次年度への引継ぎと、現時点ではカリキュラム担当者のみが操作を行っている状況であるため、学籍システムについて全体共有を行う必要がある。</p> <p>3) 各プロジェクトによる取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・環境・ICT 整備プロジェクト <p>ICT を活用し、導入したものへの効果を測定し活用範囲の拡大を図る。文書管理についての標準化できるよう継続して整理する。学生の清掃を自立的な活動となるよう働きかけを継続する。</p> ・学校評価プロジェクト <p>学校評価に対する理解を深め、継続して学校目標に取り組んでいるため、定着できるように意識づけする必要がある。</p> ・心理的安全性プロジェクト <p>挨拶の啓蒙は今後も継続し、教員・学生共に会議やグループワークなどで自分の意見や感情を表現してできるような環境を作る。そのうえで、仕事や学習が効率よくできるようにしていく必要がある。</p>

目標 5 臨床との連携強化による医療者育成支援

<p>取り組み</p>	<p>1) 臨床への公開授業の開催 2) 薬学部実習生への研修企画、運営 3) ホームカミングデイの開催 4) 実習指導者の育成</p>
<p>評価</p>	<p>1) 臨床への公開授業の開催 昨年度、臨床への公開授業として実技評価の見学を企画したが参加者が0名であった。そこで今年度は、母体病院だけでなく近畿グループ内の病院 20 施設に対して案内を行った。さらに、実技評価、OSCE、授業研究への参加、教員シャドウイングなど様々な参加方法を提示した。教員のシャドウイングではそれぞれの参加者のニーズに応じて開催日や内容を検討した。その結果、母体病院を含む5施設、延べ47名の参加があった。そのうち、母体病院からの参加は延べ20名であった。 アンケート調査では、今後の学生指導や後輩育成への活用ができるの項目に対して100%が「はい」と回答した。自由記載では、学生とのリフレクションをどのように実施すると効果的であるのか、それぞれの学生に応じて指導方法を変更することの重要性について学ぶことができた等の回答が得られた。</p> <p>2) 薬剤部実習生（薬剤師含む）への研修企画、運営 昨年度に引き続き、薬学部生の実習生に「バイタルサイン測定」「点滴静脈内注射」についての研修を3クール行った。研修参加者は30名。実習生のアンケートでは、看護師の仕事の内容がわかることで、多職種連携をすることで患者に貢献することができる等の意見があった。</p> <p>3) ホームカミングデイの開催 卒後1年目を対象にホームカミングデイを6月に実施し、47名の参加があった。体育室で体を動かすことで心身ともにリフレッシュできるように内容を工夫した。また、現在の自分の状況を開示できる場を設けた。今年度は離職防止を意識し10月にも卒後1・2年目を対象にしたホームカミングデイを実施した。1年目6名・2年目9名の参加があった。元担任も参加し交流を図り、語り合う機会とすることができた。</p> <p>4) 実習指導者の育成 「実習指導者講習会Ⅰ・Ⅱ期」「実習指導者研修」「実習指導者会議」を実習指導者育成の機会とし企画、運営また助言講師として参加した。実習の意義及び実習指導者の役割の理解を支援し、また看護師に必要な実践能力を育成するために効果的な実習指導方法について教授した。 「実習指導者会議」母体病院と月1回（8月・2月以外）実習指導者会議を開催した。計4回のグループワークを行い「Z世代の特徴的な行動とその対策・指導方法について」「学生の間に培っておきたい社会人基礎力とは」「インシデント検討・分析」「心理的安全性を意識した学生指導とは」をテーマに取り上げた。学生指導について検討する機会を設け、母体病院の実習指導者の育成に努めた。</p>
<p>今後の取り組み</p>	<p>1) 臨床への公開授業の開催 昨年度よりも母体病院からの参加者数が増加し臨床との連携強化ができた。母体病院以</p>

課題	<p>外の参加者も多く、教育への興味関心の高さを感ずることができた。今後も母体病院のみならず他施設とも連携を図り、教育力を高める機会を増やしていきたいと考える。</p> <p>2) 薬剤部実習生（薬剤師含む）への研修企画、運営</p> <p>薬学部学生への研修を行うことで、薬学部生は看護学生の教育内容をしり、多職種連携について考える機会としている。そのため、今後も多職種連携の土台作りができるよう取り組んでいく。</p> <p>3) ホームカミングデイの開催</p> <p>早期離職防止の一環として例年実施しているが、離職率の把握を十分にできていないのが現状である。ホームカミングデイの開催が、離職防止という目的を果たすことにつながっているか評価していればより良いと考える。</p> <p>4) 実習指導者の育成</p> <p>今後も引き続き実習指導者育成の機会を積極的に設けていく。</p>
----	---

<総評>

学校関係者評価委員からの意見

学生が自ら学べるように、学びが深まるように、様々な取り組みがされていた。それらを実践するためには、教員間の連携が図れていること、育てたい学生像が明確であることが大切であり、取り組みの実際から熱心さがくみ取れた。また、それを継続的に取り組まれていることも評価できる。研究も3題しか発表できていないとの自己評価であったが、取り組んでいることが大切であり、業務改善に取り組む等、教員の業務過多が課題である中、オーバーワークにならないよう留意し、今後もよりよい教育の実践に努めていただきたい。